

随想

# 除夜の鐘

立田 幽石

除夜の鐘と聞くと、私には忘れられない思い出があります。で、鐘声の風韻や俳句の情緒には触れないで、私事を申して恐れ入りますが、その思い出を述べさせていただきます。

私が小学生時代……時代もそうであったのですが、私の家は特に旧弊な家柄で、除夜の鐘を聞かないうちに寝ると赤い鬚ひげが生えるよおみそかと言われ、大晦日には十二時まで寝かされなかったものです。それが小供心こどもごころに不平で、何時いつとはなしに、仏教的迷信に対して強い反感を持つようになりました。



若き日の幽石翁（17歳）

中学の終りの頃、ある書を読んで、除夜の鐘を百八撞つくのは、百八煩惱を覚醒かくせいせしめ、その一音毎ごとに煩惱を消滅して、常楽・光明の新年を迎えるため為であるということを知り、仏教も単なる迷信妄信を説くばかりでなく、見方によっては人間形成の役にも立つものであるということに気が附

いて、やや尊敬の念を生ずるようになりました。

その後中学を出て、仙台の第二高等学校二部乙(旧制理科)に入学し、生徒控室に掲示されていた至道会の檄文げきぶんを見て、大いに感銘したものです。至道会というのは禅の研究をする会で、その檄文の内容は、要するに禅の修行によって人間形成を完まっとううするという意味のものでした。仏教に対して或る種の尊敬の念を抱いていた私は、早速その会に入会しました。至道会の主なる行事は、松島の瑞巖寺ずいがんじの盤竜老師を拝請せっしんえ(かい)して撰心せんしん会を催すことであります。その盤竜老師が、或る時の提唱で「大法に不可思議なし」と獅子吼ししきうされたのを拝聴して、私はこれなる哉かなと奮なげい立ちました。何故なげならば、自然科学けんざんの研鑽けんざんを志している私にとって、迷信妄信臭い不可思議という言葉が何より嫌いであつたからです。その不可思議を説かない禅なら、一生修行を続けようと決心した次第であります。

その年の冬休みに、私は瑞巖寺の境内の養徳院に有志の学友と止宿して、参禅弁道に励おんで居りました。時恰あたがも臘月ろうげつ三十一日のこと、折しも近くしやうろうの鐘かね楼ろうで撞つき出された除夜の鐘ねを聞いて、私は前後せつたん截断せつたんされて終しまいました。天地乾坤けんこんただ鐘かねの音一枚、そこに遠近もなく古今もなく新旧もなく自他もなく「天地と我と同根・万物と我と一体」という三昧さんまいの境致きんざいに打入おしたのです。ここに於て私は、大自然えんげんの生命せいめいの淵源えんげんに触れ、如是にの大法の根本を悟ったのであります。

その後、東京の帝大の理学部に入学するに及んで、下谷したやの両忘庵りやうぼうあんの釈宗活しゃくしやうくわく老師に相見あひまして入室参禅を許されました。そして悟後の差別さつべつ微妙みみょうの法門ぽうもんを手に入れるようになってからは、「柳暗花明・棄てべき法は一法も無し」ということに徹しました。不可解な独断どくたんと思われた仏説も非科学的ひけつぎやうと感じたいろいろの譬喩ひゆも、畢竟ひつぎやうは大慈大悲から発した方便であり、その人々の境涯きんげ・性格せいかくに応じて信ずるも結構、この

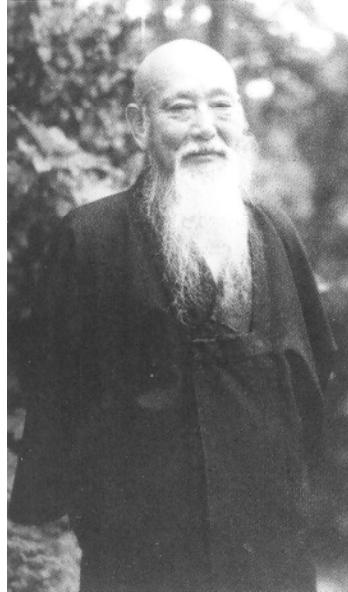
意味に於て迷信妄信も亦た風流と感ずるようになりました。

除夜の鐘を聞かないで寝ると赤い鬚が生えるという彼の俚諺も、今では懐かしく思われ、独り白鬚を撫でて微笑んでいる次第です。

(本稿は、俳誌『曲水』昭和44年12月号から転載させていただきました。)

### 編集部注

立田幽石翁は、瑞巖寺での見性体験を『十牛の図講話』58～59頁、『人間禅の精神』(人間禅教団創立60周年記念出版)の中の「人間禅教団の来由」にも書いておられます。



立田幽石翁

### 著者プロフィール

立田幽石(道号/英山。本名/鐵二) 明治26年、東京生まれ。東京帝国大学理学部卒業。中央大学予科教授、日本医科大学教授を歴任。両忘庵釈宗活老師に参じ法を嗣ぐ。人間禅教団を創設し第一世総裁となる。師家。庵号/耕雲庵。昭和54年帰寂。